

創刊のことば

駒沢大学北海道教養部長 佐藤俊明

この度、駒沢大学北海道教養部の機関誌として『論集』が発刊されることになり誠に同慶の至りである。

本学には既に『北海道駒沢大学研究紀要』が昭和42年1月に発刊されて本年で二一号を数えている。この雑誌は年一回の発行になっているため、先生がたの研究の発表の場を、もっと増やすべきであると言う意見が教員の側から自然に、自発的に盛り上がってきた。東京本校では各学部の研究紀要と論集があるので、こちら北海道においても、それら二つをもって研究の成果を発表すべきであると言う訳である。『北海道駒沢大学研究紀要』は岩見沢駒沢短期大学と駒沢大学北海道教養部との合同機関誌であるが、『論集』はこれを機会として、教養部と短大がそれぞれ発行することになった。何事によらず、一つの事柄が成就するまでには、それなりの苦勞が付き物であるが、『論集』の生誕にも委員会の設立、規約の作成、当局の予算への配慮など約三年近くの歳月を要したと言ってよい。それだけに創刊号が発刊されるのは大変喜ばしく、教員の熱意と努力並びに関係当局に対して謝意を申し上げたい。

駒沢大学北海道教養部は仏教学部(禅学、仏教学)、文学部(国文学、英米文学、地理学、歴史学、社会学)、経済学部(経済学、商学)、法学部(法律学だけで、政治学は東京本校)、経営学部の五学部があり、二年までの学部の一部を収容しているので、先生がたの専門も多種多様に亙っている。従って、雑誌はユニークな性格を持つ代わり他面、不便な面も兼ね備えている。この『論集』は今の所、年一回発刊されることになるので、先生がたが研究された成果を一年又は二、三年も手元に抱えておかずに済むと言う利点が大きく浮かび上ってくる。現代の世は正に情報機関が発達しており、世界の種々様々な情報がコンピューターによって居ながらにして入手出来る時代である。自己の論説を逸速く発表して権利を取得しておくことが研究者に必要なになった。世知辛い世の中になったようでもあるが、これも時代の流れとも言うべきかもしれない。大学は研究と教育の場であるといわれている。校舎、教室、図書館及び諸施設はそのための補助的機関である。質の高い教員と学生に恵まれることが、一番、大学にとっては有り難いことである。

『教師は学生によって学ぶ』と言われている。即ち教場は一つの戦場であって、教師と学生がそれぞれの学問の真剣勝負をする場であり、斬るか斬られるかの場であると言う訳である。優秀な師があつて、優秀な弟子があり、又優秀な弟子があつて優秀な師があると言うのも、事の性質上、真のことを言い表していると思われる。他面、教師の学生に与える影響も大きいと通常考えられるので教員の研究、指導の重要性に就いては言うまでもないことである。『論集』の執筆者の範囲は『北海道駒沢大学研究紀要』よりも広げられている。従って、研究の成果を続いて発表されて、日を迫る毎に充実した研究誌に成長していくことを願いながら発刊のことばを結びたい。